

## 観光立県 山梨にこそ求められるおもてなし

日本を訪れた外国人旅行者が2018年に初めて3千万人を突破。昨年末の観光庁の発表は、世界文化遺産の富士山、ワイナリーなど有数の観光資源を持つ山梨県でも大いに話題となった。来年の東京五輪・パラリンピック開催へ向け、国内の観光地間で外国人旅行者の呼び込み合戦が過熱しそうだ。

大台突破とはいえ、行き先は東京、大阪を中心とした三大都市圏に偏っている。外国人延べ宿泊者でみると、三大都市圏以外の地方比率は17年の41%から18年上半期(1～9月)は41.3%と伸び悩んだ。国が目指す「30年に60%」という目標には程遠い。

地方が苦戦する状況にあって、山梨県は外国人延べ宿泊者が17年に過去最多の約161万人で全国5位と善戦している。そこで温泉郷とフルーツ郷の玄関口であるJR中央線石和温泉駅(笛吹市)の観光案内所職員に実感を聞くと、予想外の答えが。「市内より富士山方面への交通手段を尋ねる外国人が目立つ」と、富士山目当ての宿泊地、経由地に甘んじている実態を明かした。

県内の観光地間でも明暗が分かれている。宿泊者(実数)147万人のうち、富士山が立地する富士北麓・東部圏域だけで約8割を占める。日本人と日帰りを含む全観光客も富士北麓・東部のみ前年比3%増え、フルーツ王国の峡東、八ヶ岳や清里高原を有する峡北など他圏域は軒並み減った。ゴールデンルート(東京～大阪)の富士山や、富士と桜、五重塔を一緒に望める新倉山浅間公園がSNSで人気となり、富士山の一人勝ちと言える。

この現状を象徴するJR東日本のダイヤ改正が今春あった。富士山人気に対応し、富士急行線河口湖駅と中央線新宿駅を結ぶ定期特急「富士回遊」を新設。一方で特急あずさは石和温泉、山梨市、塩山の峡東圏域の3駅に止まらなくなった。公共交通後退はさらなる観光客減少という悪循環を生むだけに切実だ。地元行政と観光関係者が要望した、特急停車の維持や増設をJR側に求めたい。

27年にリニア中央新幹線開通を控え、外国人旅行者の一層の増加が見込まれる。周遊を促す観光地ごとの魅力づくりは無論、一過性で終わらせないよう、民泊確保やキャッシュレス化、多言語案内、ハラル食対応など全県への受け皿づくりが急務となる。続発する自然災害への備え、通訳案内士や外国語ボランティアを増やした「観光立県」にふさわしいおもてなし態勢も欠かせない。

山梨日日新聞社 編集局部長・総合デスク兼読者センター長 小林康治